国際地域イノベーター人材養成プログラム　科目概要
⑥ 地域づくり支援論

北海道教育大学函館校
非常勤講師　根　本　直　樹

本年度からスタートした「地域づくり支援論」は、「国際地域イノベーター人材養成プログラム」の選択必修科目のひとつに位置づけられています。この授業の概要は「短期的な複数のフィールドワークとその振り返りを通じて、課題を抱える地域の振興に必要な知識やものの見方・考え方を身につける。」です。

授業のスタートにあたってプログラム責任者からの依頼は、「実習先で３つのタイプがあり、①指示型・②課題解決型・③指示なし型の対応を事前に経験させてあげたい」との内容でした。この３つのタイプを経験させながら授業の到達目標に近づけることに留意しました。

具体的には、①として函館市地域交流まちづくりセンターが設置する移住相談窓口「移住サポートセンター」の情報提供のコンテンツづくりの支援（詳細は「北海道新聞」みなみ風2022.5.16）。②は、株式会社はこだて西部まちづくRe-Designと協働した、函館西部地区の「地域ならでは」の強みを地域資源の選定を通してその物語を構成する調査。③は町会について何も制約をもうけずに地域課題と解決法を探る調査（詳細は「北海道新聞」みなみ風2022.6.30）を行いました。

令和4年5月16日　北海道新聞（夕）　7面

移住希望者に人気 函館市電沿線

面白キャッチフレーズで紹介

函館市地域交流センターが設置する移住相談窓口「移住サポートセンター」は道教大函館校の学生と連携し、函館市内の市電沿線の「はじまって暮らし」を紹介する。大学生が移住者目線で電停周辺の徒歩10分圏を巡り、住環境や特徴などを写真やキャッチフレーズで紹介する予定で今後、同窓口のインスタグラム（アカウントは@hakodatekurashi）で発信する。（野長瀬郁美）

市の相談窓口 函教大生と連携

移住定住支援を進める同窓口は、函館での暮らしを考え始めた人に、観光情報のアプローチを学ぶ専攻科目「地域づくり支援論」を受講する学生14人に依頼した。

自家用車を持たない移住希望者の関心が高い市電沿線ではなく、具体的な生活情報を届けようと企画した。

の実態を、同大で街づくり

写真や動画 SNSで発信

調査は大型連休初日の4月29日に行われ、4グループに分かれた学生は市電で移動しながら、25カ所の電停周辺で写真や動画を撮影したり、景色や住環境、飲食店などを記録した。移住を誘うコピーやキャッチフレーズ、ハッシュタグ（検索目印）などを考えた。

参加した同大の加藤[illegible]さん（2年）＝盛岡市出身＝ら4人は末広町と谷地頭、函館駅前、堀川町、深堀町、湯の川温泉の6電停を調査した。末広町は「住む観光地」と表現し「雰囲気は良いものの坂道が多い」、谷地頭は「昭和レトロな町」とし「大型スーパーはないが自然豊かで、遊び心あふれる空間がある」などとまとめた。

自分が住む地域をよりよくしたいと願い、地域づくり支援論を学ぶ加藤さんは「住む人の目線で取り組むことで、移住者と街とのギャップが埋められるのでは」と、調査に手応えを感じた様子だった。

学生は調査内容をまとめ5月2日に、グループごとに発表した。人気洋菓子店の待ち時間を取り入れた「大町良い街50分待ち」「住みよい街とよい昭和橋」などの各地域の面白いキャッチフレーズに加え、地域の雰囲気が伝わりやすい街並みの写真など、移住希望者の参考になる情報が多く集まり、同センター職員は感謝していた。

▲市電電停の徒歩10分圏を巡り、住環境などを調査する学生＝函館市末広町

令和4年6月30日　北海道新聞（夕）13面

地域課題と解決法探る

函館　道教大生、町会活動を調査

道教大函館校の学生が函館市内の各地に赴き、地域づくりを学んでいる。4月から4カ月間、函館市電沿線や西部地区、大学周辺の町会などで演習を重ねながら、地域づくりを考える。

地域課題を多角的にとらえ、共生社会を主導する人材となる同大独自の認定資格「国際地域イノベーター」（地域づくり）養成プログラムの一環。資格取得を目指す学生が授業「地域づくり支援論」により市内3カ所で学び、演習で見えてきた地域課題をどのように解決するか探っている。

6月13日には同大周辺の町会で気づいた課題と解決法を班別に発表した。小林大雅さん、渡辺愛子さん、菊地卓斗さん（いずれも2年）は梁川町会を分析。3人は町内会役員の高齢化を課題に挙げ、役員の業務を町会員に「見える化」することで業務引き継ぎをスムーズにし、特典を設けて役員のなり手確保につなげることなどを提案した。さらに加入率アップを目指し町会同士の合同イベントの開催も断えた。

別の班からは、町会館の有効活用や、町会内外や多世代への情報発信の必要性などを指摘する発表もあり、地域に住む大学生として何ができるかなどを考えた。

福島市出身の菊地さんは、町会をまたいだ資源回収や祭りなど故郷の地域活動と比較し「函館は町会ごとの活動が多く町会の孤立が気になった。町会同士がつながることで町会活動のよさも共有できるのでは」と話した。小林さんは「演習を通じて見えたのは、函館の過疎化や高齢化」、渡辺さんも暮らしや観光に目を向け「学生の視点で新しい発見ができたら」と振り返った。学生たちは授業で学んだことを生かしながら、資格取得に向け、さまざまな視点から地域づくりを学んでいく。

（野長瀬郁実）

町会への調査で気づいたことを発表する学生

履修した学生からは、「様々な場所、様々な方と接する中で函館という町を少し理解できた気がした。自分たちで課題を発見、解決する、答えがない問いに対して向き合うことが非常に難しいことだと改めて実感させられた。」といった感想が多くありました。このほかには、「『地域づくり』に携わりたいとは考えていたものの、具体的に何をすればいいかは分かっていなかった。今まで受けた授業は、どうしても理論だけの話になってしまい、具体性、実証性に欠けていた。しかし、この授業を受けたことで、3種類の地域づくりのアプローチや、地域づくりに必要な要件を実際に感じることできた。」といった感想がありました。